

90周年記念区長対談

Suginami 5 stories

未来へ継ぐ、5つの物語



この秋、杉並区は区制施行90周年を迎えます。区の歴史を語る上で欠かせない5つの出来事を「すぎなみ5ストーリーズ」として取り上げ、さまざまな方法で次世代に継承していきます。それぞれの時代の大きな節目に、先人たちはどう向き合ってきたのでしょうか。当時を知る人たちに、田中区長が尋ねます。



第1話 前編 原水爆禁止署名運動

昭和29(1954)年3月1日、南太平洋のビキニ環礁で広島型原子爆弾の1000倍もの威力を持つ水素爆弾がさく裂しました。米ソ冷戦下に行われたアメリカの水爆実験です。1000隻以上の漁船と共に静岡県焼津市の第五福竜丸が被ばくし、乗組員23名は原子病(放射線障害)となり、半年後には1名が死亡。16日に初めて新聞報道がなされ、翌17日のラジオ放送で全国民に知らされました。日本漁船の被ばくは、後に広島・長崎に続く「第3の被ばく」と言われました。区内各地で「原水爆禁止」の声が高まり、杉並区立公民館を基点とした反対署名は、区民の3分の2以上が署名をし、やがて世界を動かすほど大きな核兵器廃絶運動の始まりとなりました。きっかけはある女性の声でした。和田堀で魚屋を営む菅原トミ子さんが、公民館でその窮状を訴えたとき、娘の竹内ひで子さんはまだ小学生でした。

「放射能で魚が売れなくなり、店を閉めなければなりません」



証言者：竹内ひで子さん

区長：水爆実験の被害が報道されると、魚が全く売れなくなったそうですね。

竹内：ラジオ報道があった日の夕方、注文の刺身等を配達すると、「魚は怖くて食べられない！」と突き返され、その日の注文は全て返品されました。他にもたくさんの漁船から高濃度被ばくの魚が水揚げされ、大量の汚染魚が埋められたり、海洋投機されたりしました。「原子マグロ」と呼ばれた上、汚染されていない近海の干物さえ売れなくなったんです。

区長：魚商組合として水爆禁止の反対署名を始められたとのことですが、それにはご両親のどのような思いがあったのですか。

竹内：父は営業不振で頭を抱える魚屋さん達に「安全で安心して食べられる魚を売りたい。生活と営業を守ろう。それにはアメリカの水爆実験を辞めさせ、遠洋漁場を守ろう！水爆実験禁止の署名活動をしよう！」と提案したんです。この呼び掛けに杉並中の魚商が結集し、「杉並区魚商水爆被害対策協議会」を結成しました。魚屋さんたちは、毎日、朝には築地市場で東京中の魚商や業者に呼び掛け、夜にはビラや署名簿作りに励みました。その結果、報道からわずか半月程度の4月2日には「買出人水爆被害対策市場大会」が開催され、直後にアメリカ大使館や日本政府に原水爆実験の即時中止等の陳情請願を行ったのです。



▲竹内さんの両親。左から母・菅原トミ子さん、父・菅原健一さん。

区長：その気持ちは、杉並区立公民館に集まった人たちへも伝えられたわけですね。

竹内：その時代、ようやく参政権を得ることができた女性たちは、出来たばかりの公民館で読書会などを開き熱心に学んでいて、母・トミ子もその一人でした。公民館で開かれた「婦人参政権行使記念講演会」の直後、母は震えながら手を挙げて、魚屋の窮状を訴えながら「原水爆禁止の署名に一人でも多く署名をお願いします。ビキニ水爆問題を取り上げてください！」と発言したわけです。

区長：その発言を、公民館の安井郁館長が大きく受け止め、区議会も全会一致で反対決議を行ったことで、運動がさらに広がっていったわけですね。

竹内：安井館長は「この問題は魚屋さんだけの問題ではない！農村も漁村もまちもそこで生きて生活している人、全人類の問題である！」と応え、参加者に署名を呼び掛けてくれました。父や母の行動・発言を口火に、区民が立ち上がったんです。また、区議会の決議や当時の高木敏雄区長が署名活動に協力してくれたことが、区民が活動しやすい環境につながったんですね。それによって、公民館を拠点に、他に類を見ないほどのスピーディーに何十万もの署名が集まり、運動が全国に広がっていったわけです。

区長：ご両親の呼び掛けが、力強いスタートとなったことが、よく分かりました。貴重なお話を聞かせていただき、どうもありがとうございます。



聞き手：田中良区長

Information

「杉並区区制施行90周年」特設ホームページを開設！

今回の「原水爆禁止署名運動」のほか、「すぎなみ5ストーリーズ」のエピソードを紹介しています。また、90周年を祝うイベント等の情報も掲載していきます。ぜひ、ご覧ください。



対談を振り返って…

区長：対談は本年1月に行われましたが、その後、世界情勢は大きく動き、ウクライナの戦禍においては核兵器使用の懸念すら高まっています。薄れつつある原水爆禁止署名運動の記憶を改めて刻み、次世代に継承することは、今日の世界平和に大きな意義があると言えるのではないのでしょうか。